



月命日に、アサクラシャドウの墓に手を合わせる(右から)大井さん、矢野さん、町さん。16本の線香の煙が風になびいた

アサクラシャドウの元気がない。銅葉(かいば)を全然食べない。「ふだんはすごく荒っぽい馬なのに、急に寒くなったからかわえ」。大井さん。馬の寿命は三千年といわれる。二十九歳のトパースミオを筆頭に、メシロサンマン、メシロボサツ(いずれも二十七歳)、トパースコロネット(二十三歳)とおじいさん、おばあさんが多い牧場だから、永遠の別れと隣り合わせの毎日だ。

六年前、日高管内浦河町にあった生産牧場をこうした、養老牧場に切り替え始めてから、死んでいった馬は二頭いる。スタッフの一人、町さんは二度とも、その場に居合わせた。一頭目は昭和六十三年一月、町さんが念願かない、静岡県からこの牧場に働きに来たその日、三十歳のオルウィタタが老衰で死んだ。初めから、生き物を飼うことの厳しさを思い知らされた。

一頭目はこの年の四月、クリエーションが二十九歳で死んだ。気が優しく、町さんの大好きな馬だった。介護の果てに息を引き取った時、町さんは既舎(きゅうしゃ)の外まで聞こえるような声で泣いた。

天

永遠の別れに目伏せ

大井さんは考え方が違う。「一生懸命、世話をした末に死ぬんです。悔いが残らないように手を尽くして、それでもだめだったら仕方ないじゃない。泣くようじゃ、生き物の世話はできません」。馬と付き合ってきた五十以上の経験が、そう言わせている。「ハムとソーセイジの原料にされていく馬に比べたら、天寿を全うする馬はほんなに幸せなことか」という思いがある。

アサクラシャドウは回復しなかった。矢野さんは、青草や小さく切ったニンジンを手から与えては「少し食べた」と喜んだ。四日目の朝、アサクラシャドウは天国に旅立った。三人は目を伏せて押し黙ったまま一日を過ごした。

牧場の大家さんである大西昭一さんの協力で、裏山に墓がつくられた。木立のすき間から太平洋が見える。月命日の午後、雪をこいで墓参りに行った三人は、花と十六本の線香を供えた。十六本は、三人と、一緒に暮らした十三頭の分だった。

〔文・松浦 真一記者〕
〔写真・河野 正敏記者〕

走り終えていけ
ブレイメンの丘

3

オアシアンファーム

登別市富浦の太平洋を見下ろせる丘にある。経営者で場長の大井昭子さん(六十)、町みどりさん(三三)、矢野千香子さん(三三)の女性三人が、引退した競走馬の世話をしている。馬はサラブレッドとアラフ合わせて十三頭。老齢馬が大半だ。